

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 14 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17H02496

研究課題名(和文) アジア太平洋における国際連盟 新たな国際連盟史研究の構築と発信

研究課題名(英文) The League of Nations in Asia-Pacific Region

研究代表者

篠原 初枝 (Shinohara, Hatsue)

早稲田大学・国際学術院(アジア太平洋研究科)・教授

研究者番号：30257274

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,490,000円

研究成果の概要(和文)：研究メンバーとの議論、学会でのパネル発表、国際的ワークショップにおける研究成果によって連盟研究に新たな視点を付加することができた。国際連盟には「正」のベクトル、すなわち国境を越えた協力を推進し相互の考え方を理解し国際的な規範を形成していくという積極的な意義(Globalism)があった。それは、公衆衛生、法的国際主義、国際知的協力委員会といった活動に顕著である。他方で、その「正」のベクトルに挑戦を投げかけた「負」のベクトルが存在した。それは、東アジアの地域性(Region)にもとづくものであり、帝国主義的秩序の残存と、各加盟国の国際連盟政策、そして満州問題が具体的な論点として挙げられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

国際連盟は、主としてヨーロッパでの活動が多く、これまで東アジア地域と国際連盟の関係については、満州事変や中国に対して行われていた技術援助についての研究蓄積があるだけであった。この研究プロジェクトでは、連盟と東アジアとの関係が、国際機関と帝国主義、帝国主義とトランスナショナルな協力、連盟が構築しようとした規範と国家、また個々のメンバーがそれぞれ連盟に対して有していた諸問題など、多層的な面から国際連盟の実相を描くとともに、東アジアの国際秩序の一端に連盟が関与したことを論証した。つまり、連盟研究に新たな視点を加えるとともに、戦間期東アジアの国際秩序の一樣相をより明示的に示した。

研究成果の概要(英文)：Our discussions among members, panel presentation at an academic association, and international workshop successfully led to presenting a new perspective to the study of the League of Nations. The League was supposed to represent something idealistic and future-oriented: the idea and practice of Globalism that facilitated international cooperation and norm-building. In East Asia, such programs as public health, legal internationalism, international intellectual cooperation epitomized such orientations. In contrast, regional dimensions challenged the positive side of the League. In the region, imperial order had existed, member states China, Siam, and Japan respectively different attitudes towards the League. And, after all, the tension between Globalism and Region erupted in the Manchurian Affairs.

研究分野：国際関係論 国際連盟 東アジア

キーワード：国際連盟 東アジア 日本 中国 タイ 国際主義 トランスナショナル

### 1. 研究開始当初の背景

国際連盟については、第2次世界大戦の勃発を避けなかったことから、失敗した組織であるという烙印を押され、長年、研究者の関心は低く、その研究は停滞していた。しかしながら、近年、国際連盟を再評価する研究が欧米でみられるようになり、国際連盟の委任統治や経済政策について、国際連盟が一定の業績を上げたこと、また連盟と加盟国との関係についても、より詳細な研究がなされるようになってきていた。日本の研究者の間でも、時を同じくして、国際連盟についてさまざまな角度からの研究が進み、公衆衛生や文化交流を視点に入れた研究が発表されるようになってきていた。しかしながら、日本人による研究成果はほとんど日本語でなされており、海外発信はできていなかった。

### 2. 研究の目的

本研究プロジェクトでは、上記に述べたような国際連盟再評価の動きが欧米にある一方で、その研究が欧米(ヨーロッパ)中心主義、すなわち、欧米の研究者が国際連盟と欧米の関係を扱ったものが多いことをひとつの問題意識として有している。近年、国際連盟などの国際組織に研究についてグローバル・ヒストリーという概念も提起されてきたが、その「グローバル」の内容は依然として、欧米発信の概念や実行を分析し叙述したものが多くのである。このような国際連盟の研究史動向において、本研究は東アジアにおける国際連盟の活動を描くことで、国際連盟が体现する Globalism と東アジアというひとつの地域(Region) に絡む問題を検討する。普遍的国際組織として設立された国際連盟であるが、西欧中心主義の見方や実行を基盤とした国際連盟が、東アジアという非西欧地域にいかに対処したか、また東アジア地域の加盟国は国際連盟にどのように対応したかを解明することを目的とした。そもそも、設立につながる歴史的な文脈が異なり、国際連盟は、ヨーロッパに多大な被害を与えた第一次世界大戦を契機に、戦争防止を主たる目的として設立されたが、東アジアは第一次世界大戦から被害を受けることはなかった。また、東アジアには帝国主義秩序が依然として残存し、国際連盟加盟国のなかにも、国際連盟の政策と自国の帝国主義的利益との間に葛藤を呈する場合があったのである。この研究では、以上のように、ヨーロッパやアメリカでなされてきた国際連盟の史的研究とは、異なる歴史的な文脈を有する東アジア地域における国際連盟を再検討することを目的とした。

### 3. 研究の方法

- 1) このプロジェクトに参加する研究者の間で研究会を行う。
- 2) 日本の学会、国際政治学会において発表をおこない、一般研究者に研究成果を発表し、また議論を行う。
- 3) 各研究者は、ジュネーヴの連盟史料館や関係する資料館(TNA in London) において資料収集をおこない、自己の研究ペーパーを書く。
- 4) イギリス、スイス、オーストラリア、タイ、中国、台湾から、研究者を招いて、国際的ワークショップをおこなう。
- 5) ワークショップでの発表をもとに、プロジェクト全体としての統一性や各ペーパーの重複を避けて、各研究者は、ペーパーを完成させる。最終的には、編著 *The League of Nations in East Asia: Globalism and Region* という英文の著作にまとめる。

### 4. 研究成果

#### 【4 - 1. 事業としての成果】

- 1) 各研究者がそれぞれに、単著(英文単著を含む)や学会誌論文を発表した。
- 2) 2018年11月3日の国際政治学会において、下記のパネルを設けこのプロジェクト・メンバー全員が参加した。  
タイトル「アジアから見た国際連盟—設立100周年に向けた国際連盟史の再検討」  
司会 篠原初枝  
報告 詫摩佳代「国際連盟シンガポール伝染病情報局とアジアの地域秩序」  
高橋力也「国際連盟における国際法典編纂事業と日本」  
齋川貴嗣「国際連盟の知的協力事業と日本・中国」  
討論 後藤春美 等松春夫
- 3) 日本国際政治学会の機関紙である『国際政治』193号「歴史の中の平和的国際機構」(2018年)の編集を、研究責任者がおこない、また研究分担者2名がこの特集号に論文を寄稿した。
- 4) 2020年1月10日から11日にかけて、イギリス、スイス、オーストラリア、タイ、中国、台湾からの研究者を招いて、「The League of Nations and East Asia: Globalism, Empires and Inter-Civilization」と題する、国際ワークショップを開催した。  
このワークショップでは、英語による11本の論文が発表された。論文のタイトルは下記である。  
“Re-assessing the nature of the inter-war order in Asia and the Pacific: Inter-imperial humanitarianism of

experts, NGOs, and the League of Nations.”

“The activity and legacy of the Far Eastern Bureau of the League of Nations: As a key knot in connecting regional and international orders.”

“The Diplomatic and functional construction of Chinese sovereignty: Between the Lytton commission and flood relief.”

“Japanese International Lawyers and the Codification of International Law in the League of Nation.”

“Attempt of Neutrality: Siam’s Coping with the League of Nations’ Multilateral Challenge.”

“China’s Public Opinion toward the Lytton Commission.”

“Intellectual Entanglements between the League of Nations and East Asia: Modernism or Anti-Modernism?” “Technical Issues of the League of Nations and the Empires in East Asia.”

“The League of Nations and International Administration of Manchuria 1932: The Lytton Report Revisited.”

“Who Killed the League? Japan as a *de-facto* Empire Builder vs Emerging Global Legitimacy.”

“China’s Policy toward Abyssinia Questions in the 1930s.”

5) 上記のワークショップをもとに、現在、英文の編著についての Book proposal を作成中であり、その編著の仮題は、*The League of Nations in East Asia: Globalism and A Region* である。

#### 【4 - 2 研究内容における成果】

上記のような事業としてのプログラムを行った結果、今までの国際連盟研究に新たに寄与する視点は以下のものとなる。

1) アジアにおける複層的な秩序 国際連盟によるグローバルな秩序、帝国主義的秩序、既存の国家間秩序の存在。

これまでの研究においては「リベラル国際主義」が国際連盟を考える上で、ひとつの重要な指標となっていた。しかしながら、アジア・アフリカ地域における連盟を考察する場合には、必ずしもこの考え方に妥当性が見られない。この「リベラル国際主義」はナショナルとインターナショナルという2分法に基づくものであるが、アジア地域における専門家のネットワークを考える上では、「帝国間主義 (inter-imperialism) といった概念を用いた方が、その複層的・重層的な関係をよく理解できる。またジュネーブ発信の「リベラル国際主義」がはらむ問題性を再考すべきであり、アジアには植民地が残存していたことからすれば、’liberal inter-imperialism (and inter-colonialism)’ の概念が有益と思われる。

このような帝国の存在は、国際連盟が行った技術援助とナショナリズム・主権の問題にも絡んでくる。国際連盟による中国への技術援助は中国を利するものであったが、中国内部では、中国の主権を侵すものではないかという議論があった。すなわち、欧米諸国や日本によって主権を侵害されてきた中国にとっては、連盟によるグローバルな技術援助も、また形を変えた帝国主義であるという理解もされたのであった。

#### 2) グローバリズム・国際的な文明の対話

帝国主義秩序が残存する一方で、国際連盟が行った活動が国境を越えたグローバルな活動として発展したという面もあり、また連盟内にも欧米中心主義の傾向が存在することを意識し、西洋と非西洋の対話を試みたのである。

グローバルな活動の一つが、国際連盟がシンガポールに設置した連盟国際保健機関 (League of Nations Health Organization) である。アジアにおける疫病の防止は第一次世界大戦前からの問題であったが、1925年にシンガポール支部が設立されたことによって、国際連盟の活動がアジアにも広がり、伝染病の防止や公衆衛生の協力といった事業での業績をあげていった。公衆衛生問題は国境を越えた課題であったので、この問題を考察することにより、連盟の Globalism がどのように地域に作用したかを考えることができる。他方で、この公衆衛生事業も決して中立とはいえず、時としては国家の利益に影響を受けることもあった。

国際連盟による Globalism に連なるひとつのプロジェクトとして「国際法の法典化事業」があげられる。国際連盟法典化会議が1930年にハーグで開催され、慣習国際法の成文化をめざすことで、「法による平和」・「法的国際主義」を目指したのである。この事業において、日本の国際法学会も、それまで培ってきた国際法の蓄積を国際社会に発信しようとした。近代日本は、不平等条約の改定問題もあり、国際法学の吸収には熱心だった。1926年に日本の国際法学会が提出した法典化素案は、国際連盟の内部においても関心を引くものとなり、1928年の連盟総会において言及された。日本の国際法学会の立場が自国の立場を国際的に高めようとするナショナルな志向を持っていたことは事実であるが、同時に日本なりに「法的国際主義」貢献しようとしたのである。

1922年に設立された国際知的協力委員会は、色々な国家から構成される国際連盟において、お互いの考え方を理解し尊重しようとする知的交流プログラムを推進してきた。この知的協力プログラムを、中国と日本はその熱心に支持してきた。日本では、この知的交流プログラムは、日本文化を国際的に紹介するための方策として理解され、西欧文化とは相対的に異なる日本文化という立場が提示され、その言説は「反モダニズム」の様相が強かった。これに対し、中国では、知的交流プログラムは、中国の国家建設に必要な一助として理解され、「モダニズム」を志向するものとして理解された。このような日中の態度の相違は、国際知的協力委員会に内在するものでもあった。

#### 3) 東アジアの加盟国

国際連盟において東アジアにおける連盟加盟国やシャム（タイ）、中国、日本であったが、その各国の国際連盟に対する認識や政策は異なるものであった。

シャムのエリート層は、国際連盟が道義的に高い意義を有していることを理解していたが、国際連盟がその道義的目的を達成できるかについて疑念を有していた。国際連盟に参加したタイであったが、国際連盟は西欧大国を中心とする機関であるという認識を抱いていた。他方、大国の恣意的行動を抑制する多国間枠組として、国際連盟が機能する可能性について期待もしていた。国際連盟が国際社会における正統な機関であることで、シャムはまた、自国の主権を確固たるものとし、自国が近代国家であると評価される機会であるとも感じていた。但し、大国中心への懐疑心は強く、重大な問題にはなるべくかかわらず、中立の態度をとろうとしていた。

中国とイタリアは1934年に正式の外交関係を樹立し、イタリアに中国は大使館も設置し、ムッソリーニは、蒋介石政権に軍事アドバイザーを派遣したのである。しかしながら、イタリアのエチオピア侵攻は、中国に難しい問題を投げかけることになった。イタリアは、中国にいたイリアの対場を支持してほしいと要望したが、中国は満州問題での日本への制裁を望んでいたので、連盟における投票は棄権した。他方、イギリスがイタリアに対する非承認政策を国際連盟で提起した時には、イギリスの提案に従った。イタリアが、満州国承認の代わりに日本にアビシニア併合の承認を求めていると聞いた時、イタリア大使は中国とイタリアの友好関係は変わらないとしたが、1937年の日中戦争開始後、日本とイタリアの関係はより密接になっていった。

日本は、国際連盟の常任理事国になったことを誇りに思っていたが、外務省において国際連盟についての関心は低く、その比重も高くはなかった。常任理事国の一員として、ジュネーブにおいて石井菊次郎や安達峰一郎などの日本の外交官は、特にヨーロッパの少数民族問題において活躍した。日本は、少数民族問題に利害関係のない国であったからである。他方で、国際連盟の理念が、日本社会に浸透することはなかった。日本は第一次世界大戦を経験しておらず、戦争の悲惨さを理解していなかったからである。このため、日本は国際連盟が主導する戦争規制の枠組みは消極的であった。連盟は、1920年代の実行や不戦条約の締結もあり、戦争の違法化規範が浸透していった。満州事変が勃発すると、1931年の理事会では明らかに日本を非難する声が他の加盟国から上がっていた。

#### 4) 満州問題

東アジア地域におけるGlobalismとRegionという問題が、顕在化し連盟で問題となり、さら連盟に大きな打撃を与えたのが満州問題であった。

1932年にリットン報告書が提出されたとき、満州国は既存の主権国家という枠組みでとらえられるものではないという見解があった。この考え方によれば、満州地域は何らかの国際的なコントロールのもとに置くというのがよいというのである。その例として、19世紀から西欧諸国が国際管理をしてきた地域を先例として考えた。また、ダンツィヒやザール地方のような国際連盟による管理方式の可能性も考察された。あるいは、1911年の辛亥革命以後とられてきた中国での地方自治を認めるなどの方式も一案として議論された。このように満州地域に関する管理策を考える過程が、リットン報告書作成においては見られたのである。同報告書では、また今日の国際連合平和維持活動のような政策も一案として挙がっていたのであり、リットン報告書が示唆することは大きな意味があった。

中国においては、国際連盟設立時から、連盟を支持する世論の形成は見られなかった。中国において当時読まれていた新聞などの媒体を分析すると、満州事変以後、中国の国際連盟に対する態度は変化していった。当初は国際主義を体現する国際連盟に対する期待もあったが、徐々に中国内部の言説ではナショナリズムが強くなっていった。国際連盟による満州事変への対応について、これらの媒体では、連盟が国際正義を支持するといってもそれは大国主導によるものにすぎないといった落胆が広がっていった。

満州事変は、連盟の衰退を導いたと理解されることが多いが、他方で、この問題を議論する過程では、戦間期において「主権概念」をいかに理解するかという論点が議論される過程でもあった。満州事変における中国の対応を分析するならば、国内状況は混乱し統一政府が存在するかという状況において、中国の外交官は中国は主権国家であることを前面に押し出して自国の立場を国際連盟では擁護した。国際連盟は、平和の維持には失敗したと言えるかもしれないが、外交上の闘いの舞台でありこの舞台における論戦を通じて、「主権」の概念はより精緻なものとなっていったのである。

#### 【4-3 総括】

このプロジェクトにおける各論的研究をまとめる。国際連盟には「正」のベクトル、すなわち国境を越えた協力を推進し相互の考え方を理解し国際的な規範を形成していくという積極的な意義(Globalism)があった。それは、公衆衛生、法的国際主義、国際知的協力委員会といった活動に顕著である。他方で、その「正」のベクトルに挑戦を投げかけた「負」のベクトルが存在した。それは、東アジアの地域性(Region)にもとづくものであり、帝国主義的秩序の残存と、各加盟国の国際連盟政策、そして満州問題が具体的な論点として挙げられる。短期的には「負」のベ

クトルが「正」のベクトルを打ち負かしたように見えるが、満州事変の議論において主権概念が発達したことや、戦後に公衆衛生プロジェクトが引き継がれたことを考えるならば、東アジアに基軸にして国際連盟をとらえても、国際連盟が失敗とは言い難いであろう。すなわち、このプロジェクトにおいては、国際組織の歴史研究に、Globalism と Region がもたらす協力や緊張という問題性をあぶりだしたといえる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計14件（うち査読付論文 14件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 詫摩佳代	4. 巻 193
2. 論文標題 国連システムの構築におけるトランスナショナルネットワークの役割ー戦時食糧協力からの一考察ー	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 国際政治	6. 最初と最後の頁 108 122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 齋川貴嗣	4. 巻 193
2. 論文標題 知的協力から国際文化交流へ 国際連盟知的協力国際委員会における理念変容	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 国際政治	6. 最初と最後の頁 60 - 75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 篠原初枝	4. 巻 978
2. 論文標題 2018年度歴史学研究大会報告批判	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 歴史学研究 9 7 6	6. 最初と最後の頁 36-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 篠原初枝	4. 巻 193
2. 論文標題 平和的国際機構と歴史研究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 国際政治	6. 最初と最後の頁 1 - 11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 等松春夫	4. 巻 1
2. 論文標題 もうひとつの「戦後」と日本	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 「20世紀と日本」研究会編『もうひとつの戦後史 第一次世界大戦後の日本・アジア・太平洋』	6. 最初と最後の頁 3 - 25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 等松春夫	4. 巻 2
2. 論文標題 ふたつの「戦後」 英帝国と日本	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 「20世紀と日本」研究会編『もうひとつの戦後史 第一次世界大戦後の日本・アジア・太平洋』	6. 最初と最後の頁 315 - 348
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Harumi Goto-Shibata	4. 巻 17
2. 論文標題 The League of Nations as an actor in East Asia: empires and technical cooperation with China'	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 International Relations of the Asia-Pacific	6. 最初と最後の頁 435 461
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1093/irap/lcx007	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 等松春夫	4. 巻 187
2. 論文標題 歴史認識と国際政治	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 国際政治	6. 最初と最後の頁 1 - 15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 詫摩佳代	4. 巻 33
2. 論文標題 機能的アプローチの実践と国際組織化 国際連盟、戦時食糧協力、FAOへ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東京大学大学院総合文化研究科国際関係論研究会『国際関係論研究』	6. 最初と最後の頁 27 47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 齋川貴嗣	4. 巻 193
2. 論文標題 知的協力から国際文化交流へ 国際連盟知的協力国際委員会における理念変容	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 国際政治	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋力也	4. 巻 116(3)
2. 論文標題 立作太郎以後－戦時期外務省における法律顧問設置構想－	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 国際法外交雑誌	6. 最初と最後の頁 117 137
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋力也	4. 巻 39
2. 論文標題 ルートと戦間期国際法の法典化 ワシントン会議と国際連盟の競合関係	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 アジア太平洋討究	6. 最初と最後の頁 103-141
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -



1. 著者名 高橋力也	4. 巻 204
2. 論文標題 戦間期国際法の法典化と国際法学者マンレー・O・ハドソン 国際連盟とアメリカのはざままで	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国際政治	6. 最初と最後の頁 66 - 82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kayo Takuma	4. 巻 27
2. 論文標題 Global Solidarity is Necessary to End the COVID-19 Pandemic	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Asia Pacific Review	6. 最初と最後の頁 45-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/13439006.2020.1841949	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計15件 (うち招待講演 12件 / うち国際学会 10件)

1. 発表者名 斎川貴嗣
2. 発表標題 「国際連盟の知的協力事業と日本・中国」
3. 学会等名 日本国際政治学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高橋力也
2. 発表標題 「国際連盟における国際法典編纂事業と日本」
3. 学会等名 日本国際政治学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 詫摩佳代
2. 発表標題 「国際連盟保健機関 (LNHO) 極東支部の活動と遺産」
3. 学会等名 日本国際政治学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Harumi Goto-Shibata
2. 発表標題 Challenging the Imperial Order: The League of Nations and Social Question in East Asia
3. 学会等名 Global History Workshop-Roundtable (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hatsue Shinohara
2. 発表標題 The Role of Culture in International Relations: Korean Wave in Japan
3. 学会等名 Trilateral Secretariat International Workshop (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 後藤春美
2. 発表標題 国際連盟の社会人道面での活動と東アジアの帝国秩序
3. 学会等名 第10回グローバル・ガバナンス学会 (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Kayo Takuma
2. 発表標題 Global Health Governance in a globalised world: historical evolution and the present problems
3. 学会等名 Japanese-Canadian Frontiers of Science: JCfOS (sponsored by JSPS, The Royal Society of Canada, and Canadian Institute for Advanced Research) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 高橋力也
2. 発表標題 国際法の法典化と戦間期日本 外交保護権における文明国標準をめぐって
3. 学会等名 「20世紀と日本」研究会 (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Rikiya Takahashi
2. 発表標題 Japanese International Lawyers and the Codification of International Law in the League of Nation
3. 学会等名 The League of Nations and East Asia: (招待講演) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Harumi Goto-Shibata (後藤春美)
2. 発表標題 The Technical Issues of the League of Nations and the Empires in East Asia
3. 学会等名 The League of Nations and East Asia: (招待講演) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Hatsue Shinohara
2. 発表標題 Who killed the League
3. 学会等名 The League of Nations and East Asia: (招待講演) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Takashi Saikawa
2. 発表標題 Intellectual Entanglements between the League of Nations and East Asia: Modernism or Anti-Modernism?
3. 学会等名 The League of Nations and East Asia (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kayo Takuma
2. 発表標題 The activity and legacy of the Far Eastern Bureau of the League of Nations
3. 学会等名 The League of Nations and East Asia (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Haruo Tohmatsu
2. 発表標題 The Background to the Lytton Report The Evolution of the Idea of an Internationally Administered Manchuria
3. 学会等名 The League of Nations and East Asia (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Haruo Tohmatsu
2. 発表標題 The Impact of D-Day Landing on Japan's Strategy in the Pacific
3. 学会等名 Global War Studies (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計10件

1. 著者名 高橋力也	4. 発行年 2018年
2. 出版社 千倉書房	5. 総ページ数 358
3. 書名 もうひとつの戦後史 - 第一次世界大戦後の日本・アジア・太平洋	

1. 著者名 詫摩佳代 (共著)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東洋経済新報社	5. 総ページ数 印刷中
3. 書名 新しい地政学の時代』(第5章、詫摩佳代「国際保健協力という可能性 グローバル・ガバナンスと地政学」)	

1. 著者名 詫摩佳代 (共著)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 印刷中
3. 書名 『グローバルガバナンス論の新展開 制度・過程・行為主体』(第16章、詫摩佳代「保健医療分野のグローバル・ガバナンス」)	

1. 著者名 Haruo Tomatsu	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Sussex Academic Press	5. 総ページ数 308
3. 書名 Spain 1936: Year Zero	

1. 著者名 等松春夫	4. 発行年 2018年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 492中の153-176
3. 書名 伊藤之雄・中西寛編『日本政治史の中のリーダーたち』	

1. 著者名 Hatsue Shinohara	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Oxford University Press	5. 総ページ数 356のうち266-282
3. 書名 “International War and World War I: A Pivotal Turn,” in Thomas W. Zeiler, David K. Ekbladh and Benjamin C. Montoya, eds., Beyond 1917: The United States and the Global Legacies of the Great War	

1. 著者名 Hatsue Shinohara	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Oxford University Press	5. 総ページ数 395のうち315-334
3. 書名 “Drift toward an Empire? The Trajectory of American Reformers in the Cold War,” in Martti Koskeniemi, Walter Rech, and Manuel Jimenez Fonseca, eds., International Law and Empire: Historical Explorations	

1. 著者名 Harumi Goto-Shibata	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Palgrave Macmillan	5. 総ページ数 xiii + 294
3. 書名 The League of Nations and the East Asian Imperial Order, 1920-1946	

1. 著者名 篠原初枝 (牟倫海訳)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 社会科学文献社	5. 総ページ数 261
3. 書名 国際連盟の世界和平之夢与挫折	

1. 著者名 詫摩佳代	4. 発行年 2020年
2. 出版社 中央公論新社	5. 総ページ数 238
3. 書名 人類と病	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	後藤 春美  (Shibata-Goto Harumi)  (00282492)	東京大学・大学院総合文化研究科・教授   (12601)	
研究分担者	等松 春夫  (Tohmatsu Haruo)  (20297097)	防衛大学校(総合教育学群、人文社会科学群、応用科学群、電気情報学群及びシステム工学群)・人文社会科学群・教授   (82723)	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	齋川 貴嗣 (Saikwa Takashi) (30635404)	高崎経済大学・経済学部・准教授  (22301)	
研究分担者	詫摩 佳代 (Takuma Kayo) (70583730)	東京都立大学・法学政治学研究科・教授  (22604)	
研究分担者	高橋 力也 (Takahashi Rikiya) (80779843)	日本大学・国際関係学部・講師  (32665)	

## 7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 The League of Nations in East Asia	開催年 2020年～2020年
--	--------------------

## 8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
英国	London School of Economics		
スイス	Basel University		
米国	Princeton University		
United Kingdom	London School of Economics		
Australia	Australian National University		
その他の国・地域	台湾 Academic Sinica		
中国	武漢大学		